

第5週間の水曜日

第19カフィズマ (本来は第5週は第20カフィズマ)

第1段 第134、135聖詠

しゅ な ほ あ しゅ しよぼく しゅ いえ わ かみ いえ にわ た もの ほ
主の名を讃め揚げよ、主の諸僕、主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、讃め

あ しゅ ほ あ しゅ じんじ そのな うた こ たの
揚げよ。主を讃め揚げよ、主は仁慈なればなり、其名に歌へ、是れ樂しければな

けだししゅ おのれ ため えら えら そのぎょう
り。蓋主は己の爲にイアコフを選び、イスライリを選びて其業となせり。

われしゅ おおい し われら しゅ しよしん もつともたか し しゅ およ ほつ
我主の大なるを知り、我等の主の諸神より最高きを知れり。主は凡そ欲

ところ てん ち うみ ことごと ふち おこな くも ち はて お いなずま
する所を天に地に海に悉くの淵に行ふ、雲を地の極より起こし、電

あめ うち つく かぜ そのくら いだ かれ しよし う ひと
を雨の中に作り、風を其庫より出す。彼はエジプトの初子を撃ちて、人より

かちく およ かれ なんじ うち おい きゅうちようきせき およ
家畜に及べり。エジプトよ、彼は爾の中に於て休徴奇跡をファラオン及び

そのことごと ぼく うえ つかわ かれ おお たみ う ゆうりよく おう ほろぼ
其悉くの僕の上に遣せり。彼は多くの民を撃ち、有力の王を滅せ

すなわち おう おう およ しよこく かれら
り、即アモレイの王シゴン、ワサンの王オグ、及びハナアンの諸國なり、彼等

ち たま ぎょう そのたみ ぎょう しゅ なんじ な なが
の地を賜ひて業となし、其民イスライリの業となせり。主よ、爾の名は永

あ しゅ なんじ きおく よよ あ けだししゅ そのたみ しんばん そのしよぼく
く在り、主よ、爾の記憶は世に在り。蓋主は其民を審判し、其諸僕に

あわれみ た いほう ぐうぞう すなわちぎん すなわちきん ひと て わざ かれらくち
憐を垂れん。異邦の偶像は乃銀、乃金、人の手の造工なり。彼等口

い め み みみ き そのくち いき これ つく もの
ありて言はず、目ありて見ず、耳ありて聽かず、其口に呼吸なし。之を造る者と

およ これ やの もの これ あいに いえ しゅ あが ほ
凡そ之を恃む者とは是と相似ん。イズライリの家よ、主を崇め讃めよ。アア

ロンの家よ、主を崇め讃めよ。レウィの家よ、主を崇め讃めよ。主を畏るる者

よ、主を崇め讃めよ。イエルサリムに在す主はシオンに崇め讃めらる。「ア ril
イヤ」。<145 聖詠省略>

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す。

(詠) 今も何時も世々に、「アミン」

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光栄は父と子と聖神^oに帰す。

誦経者の「光栄は」に続いて



今も 何時も 世々に アミン ア ril イヤ、ア ril イヤ ア ril イヤ

3回



神よ光栄は なんじに 帰す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、

誦経者の「今も」に続く



光栄は 父と子と 聖神に帰す

誦経 今も何時も世々に、「アミン」。

第二段 第 137-139 聖詠

われこころ つく なんじ さんえい しょてんし まえ おい なんじ うた けだしわ くち
我 心を盡して 爾を讃榮し、諸天使の前に於て 爾に歌ふ、蓋 我が口の

ことば なんじことごと これ き われなんじ せいでん まえ こうはい なんじ あわれみ
言は 爾 悉く之を聴けり。我 爾が聖殿の前に叩拜し、爾の 憐と

なんじ しんじつ ため なんじ な さんえい けだしなんじ なんじ ことば こうだい
爾が眞實の爲に 爾の名を讃榮す、蓋 爾は 爾の言を廣大にして、

もろもろ なんじ な こ わ よ ひ なんじわれ き わ たましい いさ
諸の 爾の名に逾えしめたり。我が呼びし日、 爾我に聴き、我が 靈を勇

しゅ ち しょおうなんじ くち ことば き とき みななんじ さんえい しゅ
ませたり。主よ、地の 諸王 爾が口の言を聴かん時、皆 爾を讃榮し、主

みち うた けだししゅ こうえい おおい しゅ たか へりくだ もの み ほこ
の途を歌はん、蓋 主の光榮は大なり。主は高くして、謙 る者を見、誇

もの はるか し われも かんなん うち ゆ なんじわれ い なんじ て の
る者を遙に識る。我若し艱難の中に行かば、爾 我を生かし、爾 の手を伸べ

わ てき いかり おさ なんじ みぎ て われ すく しゅ われ かわ おこな
て我が敵の怒を抑へん、爾 が右の手は我を救はん。主は我に代りて行は

ん、主よ、爾 の 憐 は世世にあり、爾 の手の造りし者を棄つる 母れ。

誦經 光榮は父と子と聖神に歸す。

(詠) 今も何時も世世に、「アミン」

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光榮は父と子と聖神^oに歸す。

誦經者の「光榮は」に続いて



今も何時も世世にアミン ア ril イヤ、ア ril イヤ ア ril イヤ

3回




神よ光榮は なんじに 歸す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、

誦經者の「今も」に続く



光榮は 父と子と 聖神に歸す

誦經 今も何時も世々に、「アミン」。

第三段 (第 140、141、 聖詠)

しゅ わ いのり き なんじ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんじ ぎ
主よ、我が 祈 を聆き、爾 の眞實に依りて我が 願 に耳を 傾 けよ、爾 の義

よ われ き たま なんじ ぼく うったえ な なか けだしおよ いのち もの
に依りて我に聴き 給え。爾 の僕と 訟 を爲す 母れ、蓋 凡そ生命ある者は、

いつ なんじ まえ ぎ てき わ たましい お わ いのち ち ふみにじ
一も 爾 の前に義とせられざらん。敵は我が 靈 を逐ひ、我が生命を地に 蹂

われ ひさ し もの ごと くらき お わ たましい われ うち もだ
り、我を久しく死せし者の如く 暗 に居らしむ、我が 靈 は我の衷に悶え、

わ われ うち むな ごと われいにしえ ひ おも およ なんじ おこな
我が心は我の衷に曠しきが如し。我 古 の日をおひ、凡そ爾 の行ひしこ

かんが なんじ て わざ はか わ て の なんじ むか わ たましい かわ
とを考へ、爾 が手の工作を計る。我が手を伸べて 爾 に向ひ、我が 靈 は渴

ち ごと なんじ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい おとろ
ける地の如く 爾 を慕ふ。主よ、 速 に我に聴き給へ、我が 靈 は衰へた

なんじ かんばせ われ かく なか しか われ はか い もの ごと われ
り、爾 の 顔 を我に隠す母れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我

つと なんじ あわれみ き たま われなんじ たの しゅ われ ゆ
に夙に 爾 の 憐 を聴かしめ給へ、我 爾 を頼めばなり。主よ、我に行くべ

みち しめ たま わ たましい なんじ あ しゅ われ わ てき すく
き途を示し給へ、我が 靈 を 爾 に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救

たま われなんじ はし つ われ なんじ むね おこな おし たま なんじ われ かみ
ひ給へ、我 爾 に趨り附く。我に 爾 の旨を行ふを教へ給へ、爾 は我の神

ねが なんじ ぜん しん われ ぎ ち みちび しゅ なんじ な
なればなり、願はくは 爾 の善なる神は我を義の地に 導 かん。主よ、 爾 の名

よ われ い たま なんじ ぎ よ わ たましい くだん ひ いた たま
に依りて我を生かし給へ、 爾 の義に依りて我が 靈 を苦難より引き出し給へ、

なんじ あわれみ もつ わ てき ほろぼ およ わ たましい せ もの たいら たま
爾 の 憐 を以て我が敵を滅し、凡そ我が 靈 を攻むる者を 夷 げ給へ、

われ なんじ ぼく
我は 爾 の僕なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と 聖神 に歸す。今も何時も世に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、 光榮は 爾 に歸す。三次

しゅあわれ
主 憐 めよ。三次

<続けて誦経>

斎1 セダレン
【坐誦讚詞】

アダムは^{ふとう}不當に^き木の^み果を^{あじわ}味ひて、^ふ不^{せつせい}節制の^{にが}苦^みき果を^と取れり、^{こうおん}洪恩なる^{しゆ}主よ、^{なんじ}爾
 は^き木の上^{うえ}に^あ擧げられて、^{かれ}彼を^{くる}苦し^{ていざい}き定^{すく}罪より^{たま}救ひ^{ゆえ}給へり。故に^{われら}我等^{なんじ}爾に^よ呼ぶ、
^{しゆき}主宰よ、^{われら}我等に^{がい}害を^な爲す^み果を^{みづか}自ら^{きん}禁じて、^{なんじ}爾の^{むね}旨を^{おこな}行ふ^えを得^{たま}しめ^{われら}給へ、我等
 が^{じれん}慈憐を^{こうむ}蒙らん^{ため}爲なり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン
 十字架生神女讃詞、同調

^{しじょう}至^{もの}淨なる^{なんじ}者よ、^{いさぎよ}爾は^{なんじ}潔^ちき^み爾の^と血より^{ちえ}身^こを取りて、^{なんじ}智慧^{うま}に^{なんじ}超えて^{うま}爾より^{うま}生れし
^{しゆ}主が^{ざいはんしゃ}罪犯者^{なか}の中に^き木に^{かか}懸れる^みを見て、^{こころ}心を^{いた}傷め、^{はは}母として^な哭^よきて^{ああ}呼べり、^わ嗚呼吾
 が^こ子よ、^こ此の^{しんせい}神聖なる^い言^{がた}ひ^{せつり}難^{なん}き^{なんじ}攝理^{これ}は何^{もつ}ぞや、^{なんじ}爾は^{ぞうぶつ}此を^い以て^{たま}爾の^{たま}造物^いを活かし^{たま}給
 へり。我^{われなんじ}爾^{じれん}の^{かしょう}慈憐を^{かしょう}歌頌す。

〈戻る。柀P12、50聖詠〉

齋2 ^{カノン}【三歌經の規程】

第三歌頌、 聖アンナの歌句、列王記第一卷二章一至十節

右誦經句、^わ我が^{こころ}心^{しゆ}は^よ主に^{よろこ}縁りて^わ喜^つび、^わ我が^わ角^{かみ}は^よ我が^{たか}神に^わ縁りて^わ高くなり、^わ我
 が^{くち}口^わは^{てき}我が^{うえ}敵^{ひら}の上^{けだしわれ}に^{なんじ}開^{すくい}けたり、^{ため}蓋^{たのし}我^{たのし}は^{たのし}爾^{たのし}の^{たのし}救^{たのし}の^{たのし}爲^{たのし}に^{たのし}樂^{たのし}む。

左誦經句、^{しゆ}主の^{ごと}如^{せい}く^{もの}聖^{けだしなんじ}なる^{ほか}者^たあ^{もの}らず、^わ蓋^{かみ} 爾^{ごと}の^わ外^{かみ}に^{ごと}他^{ごと}の^{かみ}者^{ごと}なし、^わ我が^{かみ}神^{ごと}の^{かみ}如^{ごと}
 く^{けんご}堅^{もの}固^{もの}なる^{もの}者^{もの}あ^{もの}らず。

右 句、^{おご}驕^{ことば}れる^い言^{なか}を^{きょうぼう}言^{なんじ}ふ^{くち}勿^いれ、^な狂妄^なをして^な爾^なの^な口^なより^な出^なで^なし^なむ^なる^な勿^なれ。

左 句、^{けだししゆ}蓋^{えいち} 主^{かみ}は^わ睿^わ智^わの^わ神^わに^わして、^わ行^わ爲^わは^わ彼^わに^わ權^わら^われ^わたり。

かれ そのせいしや あし まも ふほう もの くらやみ うち き
右 句、彼は其聖者の足を守る、不法の者は幽暗の中に消ゆ。

イルモス 3調「主、爾を頼む者の堅固よ」

ぎ しんぼんしゃ なんじ じゅうじか おのれ て の あだ ていざい たま いま
義なる審判者よ、爾は十字架に己の手を舒べて、仇を定罪し給へり。今は、
きゅうせいしゅ われ ほうとう なんじごうにん しゅ かな しょざい ていざい もの
救世主よ、我放蕩にして爾恒忍なる主を悲しませ、諸罪にて定罪せられし者を
すく たま
救ひ給へ。

蓋人の力を持って堅固なるに非ず、主は之に敵する者を砕かん、主は聖なり。

ぎ しんぼんしゃ なんじ じゅうじか おのれ て の あだ ていざい たま いま
義なる審判者よ、爾は十字架に己の手を舒べて、仇を定罪し給へり。今は、
きゅうせいしゅ われ ほうとう なんじごうにん しゅ かな しょざい ていざい もの
救世主よ、我放蕩にして爾恒忍なる主を悲しませ、諸罪にて定罪せられし者を
すく たま
救ひ給へ。

なか なか
智者は其の智を以て誇る勿れ、強き者は其の力を以て誇る勿れ、富む者は其の富を以
て誇る勿れ。

ひとりひと あい しゅ むかしみみしい みみ ひら ごと ならわし よ みみしい
イイス、獨人を愛する主よ、昔聾者の耳を啓きし如く、習慣に由りて聾者と
な わ たましい みみ ひら ころろ そそ すくい ことば き え たま
爲りたる吾が靈の耳を啓きて、意を注ぎて救の言を聞くを得しめ給へ。

うち
誇らんと欲する者は主を悟りて彼を知り、且つ地の中に審判と義とを行ふを以て誇る
べし。

すくい もん かみ わた はし ら てんたつしや しじょう じょさい
生神女讃詞、救の門、神に度る橋、「ハリストティアニン」等の轉達者、至淨なる女宰
よ、度生の誘惑に圍まれて荒らさるる我を導き給へ。

又、フェオドル師の作、第二調。

イルモス「諸善を耕作し、諸徳を培養する神よ」。

のぼ とどろ はて
主は天に升起りて轟けり、彼は義にして地の極を審判せん。

なんじ おお じれん よ じゅうじか のぼ われ しょよく あな ひ
ハリストスよ、爾は多くの慈憐に因りて十字架に升起りて、我を諸愆の坎より引き

いだし てん のぼ たま
出して、天に升せ給へり。

彼は力を以て其の王に賜ひ、其の膏つけられし者の角を高くせん。

ハリストスよ 爾は十字架に己の手を舒べて、爾に離れたる衆民を抱きて、爾の
権柄の下に立たしめ給へり。

光栄は父と子と聖神に帰す。

【聖三者讃詞】 三位の唯一者、永在なる三者、唯一の神性、父、子、及び義なる神よ、
爾を尊む者を救ひ給へ。

今も何時も世々に、「アミン」

【生神女讃詞】 母童貞女よ、地上の者は誰か宜しきに合ひて爾を讚美するを得ん、蓋
爾は女の中に獨選ばれて、至福なる者と現れ給へり。

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

イイススよ不順に由りて爾を悲しませし我の爲に爾は十字架に擧げられ、脅を
刺され、膽を嘗め給へり。

(詠) イルモス2調 「諸善を耕作し、諸徳で培養する神よ、爾の慈憐に因りて、實を結ばざる我が智慧
を實を結ぶ者と顯し給へ。」

第3歌頌

諸善を耕作し 諸徳を培養する かみ や、
なんじの慈憐に よーって 實を結ばざる
我が智慧を 實を結ぶものとあらわしたまへ

【小連禱】

我等復又安和にして主に祷らん。 (詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。 (詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。 (詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。(詠)
「アミン」



第八歌頌、三少者の歌句、ダニイル三章五十七至八十八節

右誦經句 ^{しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ}
主の 悉くの造物は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世々に讚め揚げよ。

左誦經句 ^{しゅ しょてんし しゅ しょてん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ}
主の諸天使、主の諸天は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世々に讚め

^あ
揚げよ。

右 句 ^{しょてん うえ あ みず しゅ ばんぐん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ}
諸天の上に在る水、主の萬軍は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世々に讚

^あ
め揚げよ。

左 句 ^{ひ つき てん ほし しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ}
日と月と、天の星は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世々に讚め揚げよ。

右 句 ^{てん もろもろ とり やじゅう いっさい かちく しゅ あが ほ かれ うた}
天の諸の鳥、野獸と一切の家畜と主を崇め讚めよ、彼を歌ひて

^{よよ ほ あ}
世々に讚め揚げよ。

イルモス「ハルゲヤの窘迫者は怒に堪へずして」。

^{じゅうじか なんじ こうべ ふ あまん ねむ つみ やみ さん ぎ ひかり}
十字架に爾の首を俯して、甘じて眠り、罪の暗を散じたる義の光なるハリストス

^{われ ほうしん いねむり おのれ ゆだ いつらく よく どこ ふ い もの ねむ め そそ}
よ、我放心の坐睡に己を委ね、逸樂の慾の床に臥して寝ぬる者に眠らざる目を注ぎ

^{われ なた たま}
て、我を宥め給へ。

人の諸子は主を崇め讃めよ、イズライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

われせんれい よ とみ な おんし かざ もの ふとう あくじ まず この
我洗禮に由りて富を爲す恩賜に飾られたる者は不當にして悪事の貧しきを好み、
しよとく うと とお あく ち ほな もと きゅうせいしゅ かえ われ い
諸徳に疎くなりて、遠く悪の地に離れたり。求む、救世主よ、還して我を納れて、
なんじ じゅうじか もつ ばんせい まも たま
爾の十字架を以て萬世に護り給へ。

主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

たましい しよよく よい しりぞ ものいみ もつ きよめ な なみだ さけ こころ たの いつらく
靈よ、諸慾の酔を退け、齋を以て潔を爲す涙の酒、心を樂しませ、逸樂を
か にくよく ほのお け もの え なんじ ため き うえ てい
枯らし、肉慾の餓を滅す者を得よ。爾の爲に木の上に釘せられしハリストスと偕
てい つと しか よよ い
に釘せらるるを務めよ、然らば世々に活きん。

諸神[°]と諸聖人の 靈 と、諸義人と心の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

【生神女讃詞】。 じゅんけつ かみ はは わ たましい きずおよ つみ けがれ なんじ さん わき そそ
純潔なる神の母よ、吾が 靈の傷及び罪の汚を爾の産の脅より注が
いずみ もつ あら そのながれ きよ たま われなんじ よ なんじ はし つ なんじおんちよう
るる泉を以て洗ひ、其流にて潔め給へ、我爾に呼び、爾に趨り付き、爾恩寵
こうむ もの もと
を蒙れる者に求むればなり。

イルモス「諸天に於て天使の聲を以て」。

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

み じゅうじか てい しんせい くるしみ う しょうてんし およ
身にては十字架に釘せられ、神性にては 苦を受けざりしイイススを、諸天使及び
われら ち うま もの ばんせい うた
我等地に生るる者は萬世に歌ふ。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

なんじ じゅうじか てい のろい あた は し う われら
ハリストスよ、爾は十字架に釘せられ、詛に當る恥づべき死を受けて、我等を
きゅうかい のが すく たま
朽壞より脱れしめて救ひ給へり。

ほ
我等主なる父と子と聖神[°]とを崇め讃めん。

〔聖三者讃詞〕 嗚呼^{ああ}三者^{さんしゃ}、聖^{せい}、聖^{せい}、聖なる^{せい} 唯一^{ゆいいち}の神性^{しんせい}、無原^{むげん}にして^{たんいつ} 單一^{たんいつ}なる^{ばんしゅう} 萬衆^{ばんしゅう}の
不可思議^{ふかしぎ}なる^{かみ} 神よ^{われ}、我^{われ}ヘルウィムの^{ごと} 如く^{なんじ} 爾^{うた}を歌ふ。

今も何時も世々に、「アミン」

〔生神女讃詞〕 潔^{いさぎよ}き者^{もの}よ、萬族^{ばんぞく}は^{なんじ} 爾^{さんび}に^{たてまつ} 讚美^{よろこ}を^{なんじ} 奉^{とうと}りて、^{けだしなんじ} 欣ばしく^{なんじ} 爾^{とうと}を^た 尊^たむ、蓋^た 爾^た
は^{つく} 造成^な主^{しゅ}を生^うみ^{たま} 給^{たま}へり、嗚呼^{ああ} 畏^{おそれ}る^{おそれ} べき^{きせき} 奇跡^{しふく}、至^{さん}福^{さん}なる^{さん} 産^{さん}や。

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

ハリストスよ、爾^{なんじ}は^{ひとつ} 一^{こと}の事^{ため}の爲^{ことごと}に^{くるしみ} 悉^しく^の 苦^{たま}を^こ 忍^{われ}び^{すく} 給^{ため}へり、是^これ^{われ} 我^{すく}を^{ため} 救^{ため}はん^{ため} 爲^{ため}
なり。我^{われなんじ} 爾^{じゅうじか}の^{くぎ} 十字架^{くぎ}と、釘^{ほふり}と、屠^{ばんせい}宰^{うた}とを^{うた} 萬^{ばんせい}世^{うた}に^{うた} 歌^{うた}ふ。

(詠) 我等主を讃め、崇め、伏し拝みて世々に歌ひ讃めん、

(詠) イルモス 2調 「諸天に於いて天使の聲を以て讚榮せらるる神を、我地に生まるる者は
崇め讃めて、萬世に歌はん。」

第8歌頌イルモス

我等主を崇め讃め伏し拝みて 世々にうたい 讃めん。
諸天に於いて天使の声を以て 讃榮せらるる
かみを 我等地に 生まるるものは
崇め歌いて 萬世にうたわん。 ヘルビムよりへ

司祭 生神女光の母を讚歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

第1句


我が心は主を あがめ 我が霊は神我が救主を 喜こーぶ

附唱


ヘルビムより 尊とく セラフィムに並びなく さかえ 貞操を



破らずして神言を 生みし 実の生神女たる 爾をあがめ 讃む

第1句 我が心は主を崇め、我が^{たましい}霊は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讀む。

第2句 その婢の卑しきを^{かえり}願み給へり、今より^{よろずよ}萬世我を福なりと言はん、→附唱ヘルビムより

第3句 ^{ちから}権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん →附唱ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の^{おご}驕れるものを散らし給へり、→附唱ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなく帰らせ給へり。 →附唱ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを^い納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、 →附唱ヘルビムより尊く

第九歌頌 聖ザハリヤの歌句、ルカ六十八至七十九節

右誦經句 ^{しゆくさん}祝讚 ^{かな}せらるる哉、^{しゆ}主イズライリの神、^{かみ}蓋 ^{けだしそのたみ}其民を ^{かえり}眷 ^{これ}みて、^{あがない}之に 贖

を爲し、

左誦經句 ^{われら}我等の爲に ^{ため}救 ^{すくい}の角を ^{つの}其僕 ^{そのぼく}ダウィドの家に ^{いえ}興 ^{おこ}せり、

右 句 ^{こせい} 古世より ^{そのせい} 其聖なる ^{よげんしゃ} 預言者の ^{くち} 口を ^{もつ} 以て ^い 言ひしが ^{ごと} 如し、

左 句 ^{すなわちわれら} 即 ^わ 我等を ^{わが} 我が ^{しょてきおよ} 諸敵 ^{およ} 及び ^{われら} 凡そ ^{にく} 我等を ^{もの} 悪む者の ^て 手より ^{すく} 救ひ、

右 句 ^{もつ} 以て ^{あわれみ} 矜恤 ^わ を ^{せんぞ} 我が先祖に ^{ほどこ} 施し、 ^{そのせい} 其聖なる ^{やく} 約、 ^{すなわちわ} 即 ^そ 我が祖 ^{アウラアム} アウラアム

^{ちか} に ^{ちかい} 矢ひたる ^{きねん} 誓 ^を を ^{記念せん} 記念せん、

イルモス「我等信者は影及び文なる律法に於て」。

^{ばんゆう} 萬有の ^{おう} 王よ、 ^{なんじほんせい} 爾本性にて ^{くるしみ} 苦 ^{あずか} に ^{もの} 與らざる者が ^{あまん} 甘じて ^{くるしみ} 苦 ^う を ^{じゅうじか} 受け、 ^の 十字架に ^の 舒べ ^み られしを見て、 ^ひ 日は ^{そのこうせん} 其光線を ^{かく} 隠し、 ^{ぜんち} 全地は ^{ふる} 震ひて ^{うご} 動けり。 ^{ゆえ} 故に ^{われなんじ} 我爾 ^{いの} に ^{いし} 祈る、 ^わ ハリ ^{たましい} ストスよ、 ^{くるしみ} 醫師として、 ^{いや} 我が ^{たま} 靈 ^を の ^を 苦し ^{給へ} 苦し給へ。

^い 謂ふ、 ^{おそれ} 我等に ^{わが} 我が ^{諸敵} 諸敵の手より ^{救はれし} 救はれし後、 ^{おそれ} 懼 ^{なく} なく、 ^{彼の} 彼の ^{前に} 前に ^{在りて} 在りて、 ^{聖を} 聖を ^{以て} 以て、 ^義 義 ^を を ^{以て} 以て、 ^{生涯} 生涯 ^{彼に} 彼に ^{事へしめんと} 事へしめんと。

^{われすくい} 我 ^{みち} 救の ^す 道を ^{じごく} 棄てて、 ^{おく} 地獄に ^{みち} 送る ^ゆ 途を行く、 ^{いつらく} 逸樂の ^{ふか} 深き ^{やみ} 暗、 ^{しょうよく} 諸慾の ^{こうげき} 攻撃、 ^{いざない} 誘惑の ^{あらし} 暴風 ^{われ} は ^{めぐ} 我を ^{ゆえ} 繞る。 ^{われなんじ} 故に ^{いの} 我爾 ^{ひとり} に ^{だいじんじ} 祈る、 ^{しゅ} ハリ ^{なんじ} ストスよ、 ^{ひとり} 獨 ^{だいじんじ} 大仁慈なる ^{しゅ} 主として、 ^{なんじ} 爾 ^{じゅうじか} の ^{もつ} 十字架 ^{われ} を ^{すく} 以て ^{たま} 我を ^{救ひ給へ} 救ひ給へ。

^{とな} 子よ、 ^{爾も} 爾も ^{至上者} 至上者の ^{預言者} 預言者と ^と 称 ^{へられん} へられん、 ^{蓋主} 蓋主の ^{面前} 面前に ^{行きて} 行きて ^{其の} 其の ^道 道を ^{備へん} 備へん、

^{われいざない} 我 ^{あらし} 誘惑の ^{かこ} 暴風に ^{しよく} 圍まれ、 ^{あならみ} 諸慾の ^{おぼ} 激浪に ^{いつらく} 溺らされ、 ^{ぐふう} 逸樂の ^{はげ} 颯風に ^う 劇しく ^{もの} 打たるる者 ^{ものいみ} は ^{おだやか} 齋 ^{しずか} の ^{うみ} 穏 ^{いた} に ^{こうおん} して ^{しゅ} 静 ^{なんじ} なる ^{じゅうじか} 海 ^{もつ} に ^{われ} 至れり。 ^{その} 洪恩なる ^{うち} 主よ、 ^{みちび} 爾 ^{すくい} の ^{むか} 十字架 ^{たま} を ^{救ひ給へ} 以て ^{救ひ給へ} 我を ^{救ひ給へ} 其 ^{救ひ給へ} 中に ^{導きて} 導きて、 ^{救ひ給へ} 救 ^{むか} に ^{たま} 向 ^{むか} は ^{たま} し ^{給へ} め ^{給へ} 給へ。

^{すなわち} 彼の ^{ゆるし} 民に、 ^{あわれみ} 其 ^{あわれみ} 救は ^{ゆるし} 即 ^{あわれみ} 諸罪の ^{ゆるし} 赦 ^{あわれみ} にして、 ^{あわれみ} 我が ^{あわれみ} 神の ^{あわれみ} 矜恤 ^{あわれみ} に ^{あわれみ} 因 ^{あわれみ} る ^{あわれみ} ことを ^{あわれみ} 知ら ^{あわれみ} し ^{あわれみ} め ^{あわれみ} ん。

^{どうていじよ} [生神女讃詞] ^{なんじ} 童貞女よ、 ^{たね} 爾 ^{にくたい} は ^{のぞみ} 種 ^{ばんゆう} なく、 ^{つく} 肉體 ^{かみ} の ^{ことば} 望 ^{はら} なくして、 ^{ばんゆう} 萬有 ^{つく} を ^{かみ} 造 ^{ことば} り ^{はら} し ^{はら} 神 ^{はら} の ^{はら} 言 ^{はら} を ^{はら} 孕 ^{はら} み、 ^{どうてい} 童貞 ^{うしな} を ^{はは} 失 ^{さんく} は ^し ず、 ^う 母 ^{たま} の ^{たま} 産 ^{たま} 苦 ^{たま} を ^{たま} 知 ^{たま} ら ^{たま} ず ^{たま} して ^{たま} 生 ^{たま} み ^{たま} 給 ^{たま} へ ^{たま} り。 ^{ゆえ} 故 ^{われら} に ^{した} 我 ^{こころ} 等 ^{もつ} 舌 ^{もつ} と ^{もつ} 心 ^{もつ} と ^{もつ} を ^{もつ} 以 ^{もつ} て

なんじ しょうしんじょ う みと あが ほ
爾を生神女と承け認めて、崇め讃む。

イルモス「無玷なる生神女よ、我等は神聖なる火」。

あわれみ あさひ
此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、

わ きゅうせいしゅ なんじ あまん じゅうじか てい しの たま しゅうじん し
我が救世主よ、爾は甘じて十字架に釘せらるるを忍び給へり、衆人を死より
すく これ いのち たま ため
救ひて、之に生命を賜はん爲なり。

くらやみ
幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。

われ き よ ころ じゅうじか き よ い けだし わ
我は木に縁りて殺され、十字架の木に縁りて活かされたり、蓋吾がハリストスは
これ てい わ てき ころ たま
之に釘せられて、我が敵を殺し給へり。

光栄は父と子と聖神^oに帰す

【聖三者讃詞】 われら ちち とも あ こ およ かれら わか せいしん いちい ふくはい
我等父と偕に在る子、及び彼等と分れざる聖神に一意に伏拜す。

今も何時も世々に、「アミン」

【生神女讃詞】。 しいい きせき おどろ きこえ いさぎよ もの いかん なんじ どうていじょ
至榮なる奇跡、驚くべき聲聞や、潔き者よ、如何ぞ爾は童貞女とし
う はは どうてい まも
を生み、母として童貞を守りたる。

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

かみ われなんじ ほこ うた なんじ くぎ かいじゅう あし じゅうじか かしょう
イイスス神よ、我爾の戈を歌ひ、爾の釘、海絨と、葦と、十字架とを歌頌す、
けだしなんじ これら もつ われ すく たま
蓋爾は此等を以て我を救ひ給へり。

(詠) イルモス 2調 「無玷なる生神女よ、我等は神聖なる火に焚かれざりし爾の童貞を崇め讃む。」

第9歌頌イルモス



〈戻る。枠のP15「常に福」へ〉

齋3

くづけ スティヒラ 【挿句の 讃頌】

わ たましい なんじ しょとく たか す つみ ふかみ くだ きょうあく あ
我が 靈よ、爾は諸徳の高きを棄てて、罪の深處に下り、兇悪なる盜賊に遇ひ
て、悪臭の傷に蔽はれ、倒されて、扶助なくして臥す。故に爾の爲に十字架に釘せ
られて、甘じて傷を受けしハリストス神に呼べ、主よ、私の爲に慮りて、我を
すく たま
救ひ給へ。

(本来は2回)

しゅ つと なんじ あわれみ もつ われら あ しか われらしょうがいよろこ
句) 主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡
び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂
しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其
しよし あらわ
諸子に著れん。

(スティヒラ繰り返し略)

ねが しゅわ かみ めぐみ われら あ ねが わて わざ われら
句) 願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等
たす たま わ て わざ たす たま
に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

【致命者讃詞】

ハリストスよ、爾の聖人の大數は爾に祈る、人を愛する主として我等を憐みて
すく たま
救ひ給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

【十字架生神女讃詞】

しゅ われ ふとう もの どうぞく おもい きず し よげん しゃ
 主よ、我不當の者は盜賊の思に傷つけられて、死するばかりになれり、預言者の
 かい わ し ひと じゅつ もつ いや み さ けえ われいた
 會は我が死するばかりになりて、人の術を以て醫されぬを見て去れり。故に我痛
 や けんび こころ もつ なんじ よ かみ じれん しゅ なんじ
 く病みて、謙卑の心を以て爾に呼ぶ、ハリストス神よ、慈憐の主として、爾の
 おおい あわれみ われ そそ たま
 大なる憐を我に注ぎ給へ。

◀→戻る。 **枠** P19「至上者よ」へ▶

六時課

斎4【預言のトロパリ】 1 調

しゅ なんじ ため くるしみ う しよせいじん くなん よ われら もろもろ やまい いや たま
 主よ、爾の爲に苦を受けし諸聖人の苦難に因りて、我等の諸の病を醫し給へ。
 ひと あい しゅ なんじ いの
 人を愛する主よ、爾に祈る。

◆ポロキメン第4調

司祭 つつし き
謹みて聽くべし。

誦經 ポロキメン しじょうしゃ しゅ さんえい なんじ な うた び かな
提綱、至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌ふは美なる哉。

大斎第5週 水曜日：(4調)

至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌うは美なるかな

(句) なんじ あわれみ あさ の なんじ まこと よ の び かな
爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉。

司祭 えいち
睿智。

誦經 イサイヤの預言書の讀

主是くの如く言う、我は始の主なり、終にも我同一の主なり。州島は見て懼れ、
地の極は慄けり。彼等は近づきて集まり、各其隣を助け、其兄弟に謂ふ、勇め
よ、彫刻師は金工を勵まし、鎚を以て平ぐる者は鐵碓を打つ者を勵まして、
鑿著の事を言ふ、此れ善しと、且釘を以て堅くして、動くことなからしむ。然れ
ども爾我が僕イズライリ、我が選びたるイアコフ、我が友たるアウラアムの裔よ、
爾我が地の極より執り、其端より召して、爾は我の僕、我爾を選べり、爾を棄
てざらんとははれし者よ、懼れる母れ、蓋我爾と偕にす、驚く母れ、蓋我は爾
の神なり、我爾を堅め、爾を助け、我が義の右の手を以て爾を支へん。視よ、
爾に向ひて怒る者は皆恥を得、辱を蒙り、爾と争ふ者は無きが如くなりて亡
びん。爾彼等を尋ぬとも、彼等即爾に仇する者に遇はざらん、爾と戦ふ者は
無きが如く、全く無きが如くならん、蓋我主爾の神は爾の右の手を執りて爾に
謂ふ、懼るる母れ、我爾を助く。蟲なるイアコフ、人少きイズライリよ、懼る
る母れ、我爾を助く、主爾の贖罪者、イズライリの聖なる者之を言ふ。

〈→梓へ戻る P36〉

晩 課

齋 5 【主よ、爾によぶ】を8調で歌う

主や汝に呼ぶすみやかに我れに至り^イたま え主やわれに聞き
 たま え主や汝に呼ぶすみやかに我れにいたり^イたま え
 汝に呼ぶとき我が祈りの声をいれたま え主やわれに聞き
 たま えねがわくは我がいのりは香炉の香りのごとく
 汝が顔のまえにのほり^{カバセ}我が手をあぐるは暮れのまつりの
 ごとくいれられん^フ主やわれにききたま え

誦經 しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ
 主よ、我が口に 衛を置き、我が 唇の門を扨ぎ給へ、我が心に

よこしま ことば かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか
 邪なる言に傾きて、不法を行ふ人と共に罪の推諉せしむる母れ。

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ
 我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、

わ うれい そのまえ あらわ わ たましいわれ うち よわ とき なんじ われ みち
 我が憂を其前に顯せり。我が 靈 我の衷に弱りし時、爾は我の途を

し わ ゆ みち おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め
知れり、我が行く路に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目

そそ ひとり われ みと もの われ のが ところ わ たましい かえりみ
を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧

もの しゅ われなんじ よ い なんじ われ かくれが い もの
る者なし。主よ、我爾に呼びて云へり、爾は我の避所なり、生ける者の

ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ われ
地に於て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我甚弱りたればなり、我を

はくがい もの すく たま かれら われ つよ
迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。<中略>

「主よ、爾に籲ぶ」に自調の讃頌を誦す、二次。諸句を「不虔者は己の網に罹り」の次句より始む。

ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ すぐ え
不虔者は己の網に羅り、唯我は過るを得ん。

われ ふとう もの わ おもい もつ どうぞく あ ちえ とりこ はなはだ きず
第八調、我不當の者は我が思を以て盜賊に遇ひ、智慧を擄にせられて、甚しく傷

たましいまった やまい しよとく は いのち みち ふ しさい わ きず なや
つけられ、靈全く病み、諸徳を剥がれて生命の途に臥す。司祭は我が傷に悩み

いや み われ かえり またたましい がい やまい しの
て醫されぬを見て、我を顧みざりき、「レワイト」も亦靈を害する病に忍びず、

われ み す さ
我を見て過ぎ去れり。

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの
句、我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に禱り、

なんじ かみ
爾ハリストス神、サマリヤよりするにあらずして、マリヤより身を取ることを嘉

しゅ なんじ じんあい もつ われ いやし ほどこ なんじ おおい あわれみ われ そそ たま
せし主よ、爾の仁愛を以て我に醫治を施して、爾の大なる憐を我に沃ぎ給へ。

わ いのり そのまえ そそ わ うれい そのまえ あらわ
句、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯せり。

いか とく いか ほまれ これ せいしゃ き けだし かれら なんじてん かたぶ
致命者讃詞、如何なる徳、如何なる譽も、之を聖者に歸すべし。蓋彼等は爾天を傾

けて降りし者の爲に己の首を劍の下に傾け、爾己を罄して僕の形を受けし
者の爲に其血を流し、爾の謙遜に效ひて、死に至るまで降り。神よ、彼等の祈禱
に因りて、爾が恵の多きを以て我等を憐み給へ。

句、我が靈我の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり。

又讃頌、イオシフ師の作、第八調。

主よ、爾は己の聖なる門徒を靈智なる天と顯し給へり。彼等の聖にせられし
轉達に由りて、我を地の諸惡より脱れしめ、節制に由りて常に我が良心の思を
爾の苦に上せ給へ、爾は洪恩にして人を愛する主なればなり。

句、我が行く路に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。

我等皆齋の時を神聖なる行を助くる者と有ちて、全心を以て泣きて救世主に
呼ばん、大仁慈なる主よ、爾の門徒に由りて、愛を以て爾を歌ふ者を救ひ給へ、
爾は洪恩にして人を愛する主なればなり。

又讃頌、フェオドル師の作、同調。

句、我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、

至りて讃美たる使徒、世界の祈禱者、病める者の醫師、壯健の守護者よ、我等齋
の時を過ぐる者を何の法を以ても護り給へ、我等皆互に神聖なる和平を保ち、
諸慾に智慧を擾さるるなく守りて、復活せしハリストスを勝利者と歌ひて、崇め

ほ 讚めん爲なり。

又、大規模の讃頌、グレチヤの「アルファワイト」(國字)に循ひて二十四章に分つ。クリトのアンドレイ師の作、第四調。

句、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。

我吾が一生を淫婦及び税吏と偕に費せり、我が犯しし諸罪の爲に年老ゆるに及びても猶痛悔するを得んか。萬有の造成主、病む者の醫師たる主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句毎に三拜を爲す。

句、主よ、我爾に呼びて云へり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於て私の分なり。

我は甚しき怠惰に耽り、泥に伏し、ウェリアルの矢に射られ、私の内にある神の像に循ひて造られし者を汚す。怠慢者を起し、罪を犯しし者を援くる主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、我が籲ぶを聴き給へ、我甚弱りたればなり。

我地上の者として地の事をのみ耕作して、人人の蹟と爲れり、爾の命に由りて婚配を爲したれども、罪を以て吾が榻を汚せり。土より我を造りし者よ、爾の造物を棄つる勿れ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、我^{われ}を迫害^{はくがい}する者^{もの}より救^{すく}ひ給^{たま}へ、彼等^{かれら}は我^{われ}より強^{つよ}ければなり。

我^{われ}は吾^わが肉體^{にくたい}の事^{こと}を慮^{おもんばか}りて、吾^わが靈^{たましい}を殺^{ころ}す者と爲^{もの}れり、逸樂^{いつらく}と諸^{もろもろ}の不當^{ふとう}なる事^{こと}とに役^{えき}して、惡鬼^{あくき}の嘲弄^{あざけり}と立て^たられたり。惡鬼^{あくき}を逐^おふ者^{もの}よ、爾^{なんじ}の慈憐^{じれん}を以^{もつ}て我^{われ}を宥^{なだ}め給^{たま}へ。主^{しゅ}よ、我^わが終^{おわり}まで亡^{ほろ}びざる先^{さき}に我^{われ}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。

句、我^わが靈^{たましい}を獄^{ひとや}より引^ひき出^{いだ}して、我^{われ}に爾^{なんじ}の名^なを讚榮^{さんえい}せしめ給^{たま}へ。

我^{われ}、縦^{ほしいまま}に衆^{しゅう}に超^こえて罪^{つみ}を犯^{おか}せり、故^{ゆえ}に棄^すてられたり、我^{われ}は肉體^{にくたい}の思^{おもい}を吾^わが靈^{たましい}に敵^{てき}する者^{もの}として有^{たも}つ、此^これ我^{われ}を昏^{くら}ます。幽暗^{くらやみ}に居^おる者^{もの}の光^{ひかり}、迷^{まよ}ふ者^{もの}の嚮導^{きやうどう}師^したる主^{しゅ}よ、我^わが終^{おわり}まで亡^{ほろ}びざる先^{さき}に我^{われ}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。

句、爾^{なんじおん}恩^{われ}を我^{たま}に賜^{とき}はん時^{ぎじん}、義人^{われ}は我^{めぐ}を環^{めぐ}らん。

預言者^{よげん}は言^{しゃ}へり、主^{しゅ}よ、吾^わが靈^{たましい}は生^いきて、爾^{なんじ}を讚^ほめ揚^あげん、我^{われ}迷^{まよ}ひし羊^{ひつじ}を尋^{たず}ねて、爾^{なんじ}の牧群^{ぼくぐん}に合^あせ給^{たま}へ。我^{われ}に痛悔^{つうかい}の時^{とき}を與^{あた}へよ、我^わが歎息^{たんそく}して爾^{なんじ}に呼^よばん爲^{ため}なり、主^{しゅ}よ、我^わが終^{おわり}まで亡^{ほろ}びざる先^{さき}に我^{われ}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。

句、主^{しゅ}よ、我^{われ}深^{ふか}き處^{ところ}より爾^{なんじ}に呼^よぶ。主^{しゅ}よ、我^わが聲^{こえ}を聽^きき給^{たま}へ。

ハリストス神^{かみ}よ、我^{われ}爾^{なんじ}の命^{めい}に背^{そむ}きて罪^{つみ}を犯^{おか}し、罪^{つみ}を犯^{おか}せり。恩主^{おんしゅ}よ、我^{われ}に慈憐^{じれん}を垂^たれ給^{たま}へ、我^わが内心^{ないしん}の眼^めを開^{ひら}き、幽暗^{くらやみ}を逃^{のが}れて、畏^{おそれ}を以^{もつ}て呼^よばん爲^{ため}なり、主^{しゅ}よ、我^{われ}が終^{おわり}まで亡^{ほろ}びざる先^{さき}に我^{われ}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

野獸は我を圍めり、主宰よ、此等より我を脱れしめ給へ。蓋爾は衆人が救を得、

及び眞實を知るに至らんことを欲す、造成主として衆人と共に我をも救ひ給へ。

主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に

赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

恩主よ、我が爲に醫治と爲り給へ、我が贖罪主及び救主よ、我を退くる母れ。我

が不法の中に臥すを見て、全能者として我を起し給へ、我も我が歌を奉りて爾

に呼ばん爲なり、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

我無知の僕として、我に與へられたる「タラント」を藏して、地に埋めたり、故

に不當なる者として定罪せられて、是より敢て爾に求むるを得ず。惡を懷はざる

主として我を宥め給へ、我も呼ばん爲なり、主よ、我が終まで亡びざる先に我を

救ひ給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

血漏を患ふる婦の爾の裾に捫るを以て苦の池を涸らしし主よ、我疑なき信

を以て爾に趨り附く者に諸罪の赦を與へ、夫の婦の如く我を納れて、吾が病を
醫し給へ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋 憐は主にあり、大なる贖
も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

言を以て天地を造りし主よ、爾寶座に坐せんに、我等皆前に立ちて、爾に我が
諸罪を告げん、彼の日の前に我を痛悔する者として納れ給へ。主よ、我が終まで
亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

惟一の救世主よ、慈憐の眼を以て顧みて、我に仁慈を垂れ、我が貧しき不當な
る靈に醫治の流を賜ひて、之を我が行爲の汚より洗ひ給へ、我が歌はん爲な
り、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

洪恩なる主よ、ウェアリアルは我が卑微なる靈を執へんと謀りて、劍を備へ、我
を爾の顔を知る知識の光照に疎き者と爲せり。能力の堅固なる者よ、我を其
器の中より奪ひ給へ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、天に居る者よ、我目を舉げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、

ひ め しゅふ て のぞ ごと われら め しゅ わ かみ のぞ その われら あわれみ ま
婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を 憐 むを俟
つ。』

われ りつぼう しんせい しよ す まった しよよく ふくえき われ ため われ に もの
我は律法と神聖なる書とを遺てて、全く諸慾に服役せり。我の爲に我に肖たる者

な しぜん おんしゅ われ まった いや たま しよよく ほろぼ こうおん もの われ
と爲りし至善なる恩主よ、我を全く醫し給へ、諸慾を滅す洪恩なる者よ、我を

はんぜい たま しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
反正せしめ給へ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

しゅ われら あわれ われら あわれ たま けだし われら あなどり あ あし
句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は 侮 に鑿き足れり。

われら たましい おご もの はずかしめ ほこ もの あなどり あ た
我等の靈は驕る者の 辱 と誇る者の 侮 とに鑿き足れり。

いんぶ なみだ もつ なんじ しじょう しそん あし うるお しゅう はし つ おのれ しよざい
淫婦は涙を以て爾の至淨至尊なる足を濕して、衆に、趨り附きて己の諸罪の

ゆるし う すす きゅうせいしゅ われ かれ しん あた たま わ よ ため
赦を受けんことを勸む。救世主よ、我にも彼の信を與へ給へ、我が呼ばん爲な

しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
り、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

以下の章には左の句を附唱す。

われら かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き
句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

わ ため へりくだ にくたい もつ おさなご な しゅ われよわ ふとう もの なんじ
我が爲に 謙 りて、肉體を以て嬰兒と爲りし主よ、我弱りたる不當の者に爾の

じんじ いってき くだ わ たましい けがれ きよ たま われ や もの けがれ
仁慈の一滴を降して、我が 靈 の汚を潔め給へ。ハリストスよ、我病める者を汚

あら いや たま しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
より滌ひて醫し給へ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

われ かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き
句、我らの神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

しゅざい なんじ はし つ つね なんじ つと ため わ たましい かた たま けだしなんじ われ
主宰よ、爾に趨り附きて常に爾に勤めん爲に吾が 靈 を堅め給へ、蓋 爾 は我の

おおい しゅご かくれが およ たすけ かみ ことば われ いき なんじ よ え
幟と、守護と、避所、及び扶助なり。神の言よ、我に勇ましく爾に呼ぶを得し
め給へ、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

きゆうせいしゅおよ じんじ かみ われら ため やぶ かき な たま けだしわれら
イイスス救世主及び仁慈なる神よ、我等の爲に壞られぬ牆と爲り給へ、蓋我等は
いぎな ならわし おこない もつ だらく なんじ ぞうぶつ おこ こうおん
誘はれて風習と行とを以て墮落せり。求む、恩主として爾の造物を起し、洪恩
なる主として我等と和らぎ給へ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮に爾に歸す。

われ とみ ついや とうし な いまうえ くる なんじ おおい した はし つ じんじ
我は富を費しし蕩子と爲りて、今饑に苦しみて、爾の庇蔭の下に趨り附く。仁慈
なる父よ、彼の蕩子の如く我を納れて、筵に與るを得しめ給へ、我が爾に呼ば
ん爲なり、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

あく かしら そねみ よ ほじ つく もの らくえん うぼ き かか とうぞく
惡の魁は猜忌に因りて始めて造られし者より樂園を奪へり、木に懸れる盜賊は、
われ おも たま い らくえん え われ しん おそれ もつ われ おも たま なんじ
我を憶ひ給へと言ひて、樂園を得たり。我も信と畏とを以て我を憶ひ給へと爾に
呼ぶ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

かみ お ごと われ て の ふかみ ひ あ たね なんじ
神よ、ペトルに於けるが如く、我に手を舒べて、深處より引き上げ、種なく爾を

う じゅんけつ ははおよ なんじ しゅうせいじん きとう よ われ おんちよう じれん あた たま
生みし純潔なる母及び爾の衆聖人の祈禱に由りて、我に恩寵と慈憐とを與へ給
へ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

句、我等の神よ、光榮は爾に歸す。光榮は爾に歸す。

われ つみ にな こひつじ われ ひび なんじ うた もの い たま われたましい からだ まった
我の罪を任ひし 羔よ、我日に爾を歌ふ者を納れ給へ。我靈と體とを全く
なんじ て わた よる ひる よろしき かな なんじ よ しゅ わ おわり ほろ
爾の手に付して、夜に晝に宜しきに合ひて爾に呼ぶ、主よ、我が終まで亡びざ
る先に我を救ひ給へ。

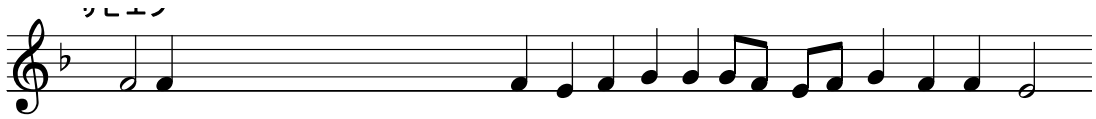
こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

ああ しじん ごうにん しゅ なんじ じれん の がた ああ むく こうおん しゅ
嗚呼至仁にして恒忍なる主よ、爾の慈憐は宣べ難し。嗚呼無垢なる洪恩の主よ、
われ なんじ かんぼせ しりぞ なか われ かんしゃ こころ いだ よろこ かつうた なんじ よ
我を爾の顔より斥くる勿れ、我も感謝の心を抱きて、喜び且歌ひて爾に呼ば
ん爲なり、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救ひ給へ。

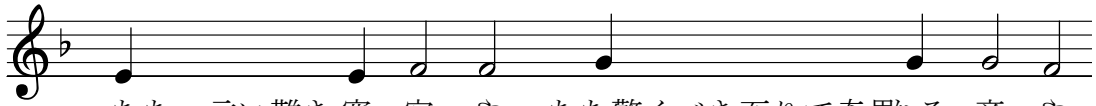
今もいつも世々にアミン

生神女讃詞、4調

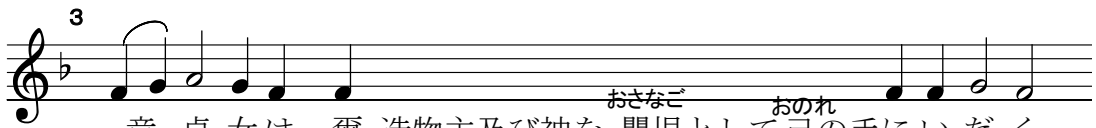
(詠) 嗚呼言ひ難き寛容や、嗚呼驚くべき至りて奇異なる産や、嗚呼如何にして童貞女は爾造物主及び
神を嬰兒として己の手に抱く。彼より甘じて身を取り給ひし恩主よ、我が終まで亡びざる先に我を
救ひ給へ。<楽譜 次ページ>



光 栄は父と子と聖神に帰すいまもいつも 世 世 にア ミン



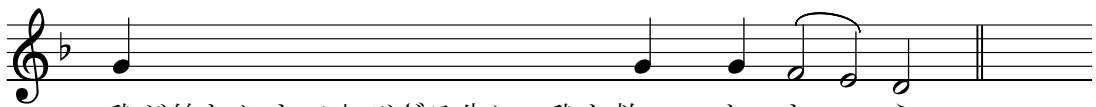
ああ、言い難き寛 容 や ああ驚くべき至りて奇異なる 産 や



童 貞 女は 爾 造物主及び神を 嬰児として己の手^{おのれ}に^{おさなご}い だく



彼より あまん じて 身を取り給いし 恩 主 よ

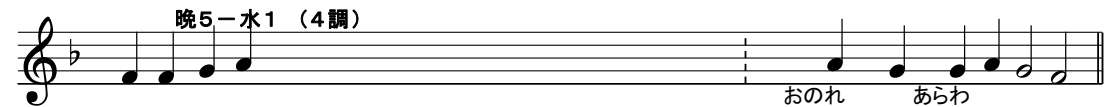


我が終わりまで亡びざる先に 我を救い た ま ー え。

<→戻る、枠 P60 「聖にして福たる」>

齋 6 【ポロキメン】と旧約聖書の読み

誦経 あだ むく かみ しゅ あだ むく かみ おのれ あらわ たま
仇を報ゆる神よ、主、仇を報ゆる神よ、己を顯し給へ。(詠)繰り返す



あだを報ゆる神よ、主 仇を報ゆる神よ、己を^{おのれ} 顯^{あらわ}したまえ

誦経 (句) ち しんぱんしゃ た きょうまん もの むく たま
(句) 地の審判者よ、起ちて驕慢の者に報い給へ。(詠)繰り返す

司祭、睿智。

誦經、創世記の讀。

司祭、謹みて聽くべし。

【創世記七章】

誦經 アウラム九十九歳の時、主はアウラムに現れて之に謂へり、我は爾の神

なり、爾我の悦を爲して、無玷なれ、我我が約を我と爾との間に立てて、甚

爾を増さん。アウラム其面に俯伏せり。神又彼に告げて曰へり、我の爾と立つ

る約は、視よ、爾は衆くの民の父と爲らん、爾の名は是よりアウラムと呼ばれ

ず、乃爾の名はアウラムと爲らん、蓋我爾を衆くの民の父と爲せり、我太

甚爾を殖し、諸民を爾より起さん、諸王は爾より出でん、我は我が約を我と

爾及び爾の後の世の子孫との間に立てて、永遠の約と爲さん、即我は爾及

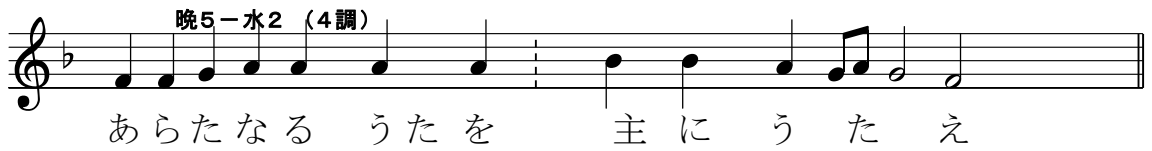
び爾の後の子孫の神と爲らん、我は爾及び爾の後の子孫に此の爾が寓れる地、

即ハナアンの全地を與へて、永遠の業と爲さん、而して我は彼等の神と爲らん。

神又アウラムに謂へり、爾及び爾の後の世の子孫は我が約を守るべし。

輔祭 謹みて聽くべし。

誦經 ポロキメン、新なる歌を主に歌へ。(詠)繰り返す



誦經 (句) 主しゅに歌うたひて其その名なを崇あがめ讃ほめよ。(詠)繰り返す

誦經 神かみが其その民たみの虜とりこを返かえさん時とき、(詠)イアコフは喜よろこび、イズライリは樂たのしまん。

輔祭 めい命めいぜよ。

両手に香炉と火つけた燭台を取り、宝座の前に立ち、東に向かって十字を描いて、

司祭 睿智、肅みて立て。

(それから西に向き直って、会衆に向かって)

司祭 ハリストスの光は衆人を照す。(このとき会衆は伏拝する。) 1

司祭、睿智。

誦經、箴言しんげんの讀よみ。

智慧ちえある子こは父ちちを悦よろこばせ、愚おろかなる人ひとは其その母ははを藐かろんず。愚おろかなる者ものの徑こみちは智慧ちえ乏とぼし、

哲さときもの者は直なおき途みちを行ゆく。相議あいはかることあらざれば 謀はかりごと破やぶる、議はかるもの者衆おおければ 謀はかりごと成なる。

人ひとは其その口くちの答こたえに由よりて喜樂よろこびを得う、言ことばを出いだして時ときに適かなふは如何いかに善よからずや。智ち者しゃ

の生命いのちの道みちは上うへに向むかふ、下しもに在ある地獄じごくを避さげん爲ためなり。驕たかぶる者ものの家いえは主しゅ之これを毀こぼち、

寡婦やもめの地界さかいを建たてん。惡者あくしゃの謀はかりごとは主しゅの惡にくむ所ところ、潔いさぎよき者ものの言ことばは其その嘉よみする所ところな

り。利りを貪むさぼる者ものは其その家いえを擾みだし、賄まいないを惡にくむ者ものは生いきん。義ぎ者しゃの心こころは答こたふべきこ

1 エルサレムの聖墳墓教会の受難週に灯りを取る儀式から始まったと言われる。

とを考へ、

不^ふ度^と者^{しや}の口^{くち}は悪^{あく}を吐^はく。義^ぎ者^{しや}の途^{みち}は主^{しゅ}の悦^{よろこ}ぶ所^{ところ}なり、之^{これ}に由^よりて敵^{てき}も親^{しん}友^{ゆう}と爲^なる。

主^{しゅ}は悪^{あく}者^{しや}より遠^{とお}し、義^ぎ者^{しや}の祈^{いのり}を聴^きく。善^{ぜん}を見る目^みは心^めを悦^{よろこ}ばせ、嘉^よき音^{おとづれ}は骨^{ほね}

を潤^{うるお}す。生^{いのち}命^{いのち}の教^{おしえ}誨^きを聴^きかん^{ほつ}と欲^{みみ}する耳^{ちえ}は智^{もの}慧^{あいだ}ある者^{とど}の間^{いましめ}に駐^すまる。誠^{まこと}命^{いのち}を棄^すつ

る者^{もの}は己^{おのれ}の靈^{たましい}を藐^{かろん}じ、譴^{せめ}責^きを聴^きく者^{もの}は聰^{さと}明^りを得^う。主^{しゅ}を畏^{おそ}るる寅^{おそれ}畏^{ちえ}は智^{おし}慧^えを教^{おし}ふ、

謙^{へりくだり}卑^{そんえい}は尊^{さき}榮^{さき}に先^{こころ}だつ。心^{はか}に謀^{ひと}るは人^あに在^{した}り、舌^{こたえ}の答^{しゅ}は主^{ぞく}に屬^{ひと}す。人^{みち}の途^{そのめ}は其^め目^め

の前^{まえ}に悉^{ことごと}く潔^{きよ}し、惟^{ただしゅ}主^{たましい}は靈^{はか}を量^{なんじ}る。爾^{わが}の作^{しゅ}爲^{たく}を主^{しか}に託^{なんじ}せよ、然^{はか}らば爾^{はか}の謀^{はか}る

所^{ところ}成^ならん。主^{しゅ}は一切^{いっさい}を己^{おのれ}の爲^{ため}に造^{つく}れり、不^ふ度^と者^{しや}は悪^{あく}しき日^ひに滅^{ほろ}びん。心^{こころ}の驕^{おご}れ

る者^{もの}は皆^{みな}主^{しゅ}の悪^{にく}む所^{ところ}なり、手^てに手^てを執^とると雖^{いえども}罰^{ばつ}を免^{まぬが}るるを得^えず。善^よき途^{みち}の始^{はじめ}

は義^ぎを行^{おこな}ふに在^あり、此^これ神^{かみ}の悦^{よろこ}ぶ所^{ところ}にして、祭^{まつり}を獻^{ささ}ぐるに勝^{まさ}れり。主^{しゅ}を尋^{たず}ぬ

る者^{もの}は義^ぎと共^{とも}に知^ち識^{しき}を得^え、誠^{まこと}に彼^{かれ}を尋^{たず}ぬる者^{もの}は平^{へい}安^{あん}を得^えん。矜^{きよう}恤^{じゆつ}と眞^{しん}實^{じつ}とに因^よ

りて罪^{つみ}は潔^{きよ}めらる、主^{しゅ}を畏^{おそ}るる寅^{おそれ}畏^{あく}は悪^{はな}より離^{はな}れしむ。

(次に先備聖體禮儀を行ふ)